様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０５６９４

研究課題名（和文）資料返還をめぐる先住民と博物館との新たな関係性の構築に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Cultural Anthropological Studies on the New Relationships between Indigenous Peoples and Museums Concerning the Repatriation of Objects from Museums

研究代表者
出利葉　浩司（DERIHA, Koji）

北海学園大学・人文学部・客員研究員

研究者番号：４０１４２０８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,400,000円

研究成果の概要（和文）：世界中どこの学術機関も良心的施設として活動してきたし、また社会的にも当然のこととして認められてきた。博物館もその一つで、先住民族からも資料を収集し展示してきた。ところが、北米やオーストラリアなどでは、このような博物館の活動に対して、先住民族側は30年ほど前から遺骨および一部資料の返還を要求しており、その作業がいま進行中である。この動きを、単に博物館の資料管理業務と見るのではなく、植民地の時代から現代まで研究機関や博物館が保持し続けてきた権力性を考えることで検討できた。さらに、先住民族と博物館とが今後、築こうとする関係性について文化人類学の視点から考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
博物館所蔵資料の返還を、博物館における単なる「資料登録抹消手続き」あるいは「厄介ごと」であり、それが問題「解決」の方法と見做すのではなく、ポストコロニアルの文脈のなかで、さらに研究倫理の問題とも関連づけて考えていくという道筋をつけることができた。この過程で、先住民族資料の返還がおこなわれている北米やオーストラリアにおける、個々の博物館ごとのより詳細な情報を集めることができたが、そこからは、国や博物館によって、また同一法律のもとでも、先住民と博物館との協働作業の在り方、今後の関係性など運用の実際はさまざまであることがわかった。このことは、国内の博物館にとって参考になるはずである。

研究成果の概要（英文）：Many museums, in the US and Australia, have returned human remains and other kinds of objects collected from indigenous peoples, according to laws and regulations. In Japan, while universities that had stored Ainu human remains without their consent, began to repatriate the remains to descendants and communities, many museum curators do not fully understand the situations and the processes of repatriation in other countries.
We should not think of repatriation in terms of only deaccessioning nor troublesome work, but instead we should take it into account the anthropological issues in the post-colonial context, including the ethical issues for researchers. We had interviewed museum-staff in the countries concerned, and the results are undoubtedly useful information for museums in Japan. What is more important might be that we had attend the American Anthropological Association (Canadian Anthropology Society) Annual Meeting at Vancouver in 2019, and presented our papers there.

研究分野：文化人類学

キーワード：博物館　先住民族資料返還　遺骨返還　先住民族　ポストコロニアル　研究倫理　北海道　沖縄

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1．研究開始当初の背景

この研究は、世界の博物館や美術館（以後、博物館で統一する）で、現在おこなわれている、先住民（族）に関する「博物館所蔵資料の返還」について、文化人類学的観点から課題を設定し、返還の歴史的経緯をふまえつつ考えてみようとするものである。

博物館は、世界の各地域で、自国の市民のみならず国外に向けてもさまざまな知の普及活動をおこなってきた。そうした博物館は、世界のほとんどの地域で、「当時の最先端を行くとされた」学術的調査研究を基盤にすえた公共的な「優良」施設と位置づけられ、そのもとに、さまざまな活動を「あたりまえ」のこととしておこなってきたのである。諸民族にかんする資料の収集活動や保管、展示活動もその一つである。こうした活動は、博物館内部だけでなく、「社会的な了解事項」としても認められてきた。

ところが、こうした博物館の活動のうち資料の収集や展示行為が、20 世紀の後半から、先住民（族）の側からの「異議申し立て」の対象になっている。それは多数者の側に立つ博物館が、他者でありかつ少数者でもあることがおおい先住民（族）の文化を、一方的に「収集」「所蔵」「管理」し、それを「研究」「展示」して、「説明」してきたという現実に対しての異議申し立てであった。ここで問題を「返還」ということに絞っていえば、とくに収蔵。展示物のなかには、先住民（族）側の了解なしに発掘され収蔵され続けている遺骨や、先住民族にとって神聖なもの、公開するだけでなく、現地から持ち去ることさえ許されないようなものも含まれていた。このことに対する非難は強烈であった。

このような異議申し立てにたいして、北米やオーストラリアなどでは、おおくの博物館側は真摯に対応してきたようだ。1990 年前後から、カナダでは先住民文化について展示するときには必ず先住民（族）側の代表と協議し、協同して展示を作りあげるようになっているし、またアメリカ合衆国では、先住民の遺骨および聖器物にかんする返還のための法律 NAGPRA（Native American Graves Protection and Repatriation Act）が成立し、そのもとで博物館が所蔵する当該資料の返還がおこなわれてきている。

ここで日本に目を向けると、大学医学部などが研究用として保管してきたアイヌ民族の遺骨に対して、1970 年代から問題化し、2000 年代には、遺骨の返還は、一部の研究者も含めて、社会的な問題となっていた。しかしながら、上述のような「世界的な」資料返還の動きについていえば、本科研の申請当時、ほとんどの博物館や関係する学会は、そこでは何が問題なのか、なぜそういう事態になったのかということに対する認識を持ちえていないだけでなく、各国の状況さえ的確に把握できているとはいいがたいというのが現状であったと思う。

そうしたなかで、つぎのような問題意識も芽生え始めていた。このような博物館所蔵資料の返還の動きについて、ただ単に、博物館での資料管理の規則が改訂され、その結果、返還がおこなわれ、手続きの完了をもって問題が解決したというように、「事務的に」考えるべきではないのではないか。そうではなく、所蔵資料の返還がおこなわれるということについて考えることで、これまでの歴史のなかで博物館が内包してきた「植民地主義」の負の遺産への問い直しをおこなってみる必要があるのではないか。さらにその問いかけを人類学や考古学など学術研究のあり方へと拡げて考えることも必要ではないだろうか。

本研究の申請当時の状況はこのようであったと認識している。

２．研究の目的

今日のグローバルな社会的状況を考慮すれば、博物館が所蔵してきた先住民（族）にかんする資料が、現在、いかなる状況にあるのか、博物館を取り巻く現状、そこからは派生する問題については、すくなくとも認識しておく必要がある。とくにアイヌ民族資料を保管してきた日本の博物館としても、このことは関心を持つべきである。そしてこの問題は、博物館が「民族学的資料の収集」という民族学、文化人類学的研究ともかかわってきただけに、博物館内部で完結する問題ではない。ここから出発し、つぎのような目的を考えた。

（1）世界の各地で、博物館と先住民（族）側とが、資料の返還にかんする「要求、協議、交渉」をとおして、現在進行的に新しい関係性を作り出しているという現状がある。そこでは文化人類学的にみて、いかなる関係性が生み出されているのだろうか。また、その一方で、このような先住民資料の返還は、それ自体世界のポスト・コロニアルな状況とも密接に関係しており、さらに研究倫理の問題までも射程にはいるものではないのだろうか。このことを、わたしたちも含めて、きちんと認識するために、自己の立ち位置を確認しつつ問題を照射し、可能であれば理論化を試みること。

（2）そして、このために、つぎの二つのことを具体的な達成目標として考えていた。まず、世界の国々で現在進行中の「先住民資料の返還」について、それぞれの地域における歴史的背景や現状をきちんと確認すること。これは一般論ではなく、それぞれの地域、博物館ごとに違いがある具体例についての、情報の収集、確認ということになる。つぎに、こうした動きを、たんに博物館が直面している事務的に処理すべき課題とのみ見なし、資料管理、登録解除という技術的問題として、そうした作業を「円滑」にすすめるためのノウハウを蓄積すればよいというのではなく、そうした資料を分析することで、これまでの博物館の歴史のなかで「あたりまえのこと」としておこなわれてきた資料の収集、管理という行為について、あらためて文化人類学的な視点か

ら問い直しを試みること。

（3）そのうえで、先住民（族）の資料について返還することを、日本においても議論するための、より広範な下地を作っていくこと。

３．研究の方法
本研究は、着手当時、日本において先行研究例はなく、また、事例報告もきわめて少なかった。そのため、わたしたちの問題意識において海外における事例を集め、あわせて研究の方向性を確認しつつ研究を遂行していくという、仮説生成型の研究方法をとった。また、本研究の問題意識は、博物館学的要請、文化人類学研究からの要請に由来しているといえるのであるが、これらは相互に関連するはずのものである。このことを意識した。具体的には、つぎの 3 つに重点を置いた。

（1）先住民資料の返還がおこなわれている地域、博物館の選定・調査
事実関係を確認する調査する博物館として、アメリカ合衆国国立自然史博物館（ワシントン,D.C.)、アメリカ自然史博物館（ニューヨーク市)、デンバー自然と科学の博物館（コロラド州デンバー市)、アンカレッジ博物館（アラスカ州アンカレッジ市)、ロイヤル・アルバータ博物館（カナダ、エドモントン市)、ブリティッシュ・コロンビア大学付属人類学博物館（カナダ、バンクーバー市)、西オーストラリア博物館（パース市)、ノーザンテリトリー美術館博物館（オーストラリア、ダーウィン市)、デンマーク国立博物館（コペンハーゲン市）をとりあげた。資料返還の担当者にインタビューをおこない、とくに資料返還の手順、返還先との交渉内容、返還後の先住民（族）と博物館との関係の変化などについて、具体例を確認した。センシティブな調査が予想されるため、訪問先はメンバーのこれまでの交流実績をもとにしたが、とくに加藤博文教授（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）には、ご協力いただいた。

（2）各人が集めた資料や情報を共有し、さらに個々の問題を確認しそれについて議論するために研究討論会をもった。とくにジェームス・クリフォード氏を招聘し 2018 年 10 月に神戸大学において討論会をもつことができたことは、本研究において有意義なことであった。（なお、クリフォード氏の招聘は、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、国立民族学博物館、九州大学、澁澤民族学振興財団の支援と協同でおこなっており、それぞれの機関でも公開講座やシンポジウムを開催するなど普及活動をおこなっている）

（3）本研究課題および調査の結果は、日本国内の博物館施設のみならずそれを利用する市民の方々にとっても、きわめて重要な意味があると考えている。にもかかわらず、博物館が所蔵する資料の返還という、市民にとってこれまでの常識から考えて「理解しがたい」状況は、世界の現実はおろか日本が現在直面している問題についても、十分に理解されているとは言いがたい。そこで、積極的に公開講座をおこなうということで、市民への普及活動にも力を入れた。

４．研究成果
上述のように調査例は多いとはいえないが、まず基本的な事実認識として、北米およびオセアニア地域の各博物館における個々の状況には、それぞれ違いがあることが改めてわかった。アメリカ合衆国では、法律のもととはいえ、そこでは博物館内部でもかなりの葛藤があったこと、また先住民（族）側と博物館側とのあいだでの協議の結果、資料の返還、あるいはその後の管理の方法も一律ではなく、さまざまな在り方があり、そこに新しい協力関係が生まれていることも具体例として知ることができた。さらに、メンバーで議論を重ねていくなかで、とくに太田好信が指摘していることだが、返還が提起するのは、器物や遺骨の返還要求に応じることで解決する問題ではなく、１９世紀から２０世紀の負の遺産について、２１世紀において（解決するかではなく）どう考えるか、という広いテーマにわたる課題であるということも、ここで明記しておきたい。詳細については、今後も、各自が論文などで発表していくことになるが、現在まで、わたしたちがおこなってきたことについて、以下に記しておくことにする。

（1）研究の到達点について
本研究課題は、世界各地の博物館でおこなわれている先住民資料の返還について、それを日本国内でも議論する下地を作ること、さらに日本国内での問題に対応していくことを、目的としてきた。本研究の過程で、わたしたちは、各人が取り扱ってきた課題は、国内だけでなく、各国の研究者にも意見を求め、議論すべきものであることをつよく認識するようになった。そのため、2019 年時点での到達点の一部を、成果の一部として 2019 年 11 月にカナダのバンクーバー市で開催された 2019 年アメリカ人類学会年次総会（カナダ人類学会との連合大会）（2019AAA/CASCA Annual Meeting）で発表すべく、申請をおこなった。結果、二つのセッションが採択され、口頭発表することができた。このことは、研究内容をひろく国際化するという意味において重要な成果である。
なお、この研究大会での発表の詳細および議論を踏まえた論考は機会を改めて発表を予定している。また、それぞれのセッションの発表者は、本研究課題だけでなく、関連する他の研究課題

のメンバーも含まれている。
セッション、発表者　発表内容については、あとに掲載する。発表要旨については、AAA のホームページ上で公開されている。

（2）研究会の開催・参加、市民への普及活動などについて
まず、日本文化人類学会が主催、法政大学国際日本学研究所、日本人類学会、日本考古学協会、（公社）北海道アイヌ協会が共催で、2020 年 1 月 26 日に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて開催されたシンポジウム『アイヌ民族と博物館-文化人類学からの問いかけ』への参画がある。これは窪田幸子、太田好信が企画、全体進行および司会を担当しており、また出利葉浩司は発表者の一人として「いま、世界の博物館で起こっていること-資料の管理と展示、その返還」と題して発表をおこなっている。
つぎに、太田好信は、所属する九州大学比較社会文化研究院主催で公開シンポジウム『アイヌ遺骨・副葬品のゆくえー返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説』を企画し、2018 年 2 月 11 日に、JR 博多シティ（福岡市）において実施している。太田は司会および問題提起として「収集された遺骨、副葬品のゆくえ」を発表している。なお、メンバーである出利葉浩司、窪田幸子、慶田勝彦、伊藤敦規が参加し、総合討論に加わっている。
そのほか、とくに北海道民に向けての普及活動として、出利葉浩司、手塚薫は、北海道内の札幌市中央区、および千歳市、恵庭市において一般市民向けの講演会をおこない、世界各地の博物館において先住民族から収集した資料の返還がおこなわれている現状について説明をおこなっている。

（3）研究成果をふまえた各種委員、委員会参加など
窪田幸子は日本学術会議第一部の会員として「地域研究委員会　歴史的遺物返還に関する検討分科会」を開催している（委員長）。太田好信、慶田勝彦も連携会員として参加し、本研究の成果を反映させている（期間は 2017 年 12 月～2020 年 9 月。市民へは非公開の会議であるが、議事次第、議事要旨は日本学術会議ホームページ上で公開中。成果は別途報告予定である）。

（4）American Anthropological Association/Canadian Anthropology society 2019 Annual Meeting 連合の年次大会における各セッションの標題と発表者（本研究関係者を含む）および発表内容は以下のとおりである。（2019 AAA/CASCA Annual Meeting Program “Changing Climates” より抜粋）発表はタイトルだけではあるが、本研究が、どのような研究とリンクしようとしているのか、その可能性についてもおおよそ理解していただけると思う。

3-0395 Charting New Relationships: The Framework of “Repatriation” and “Return” in Global Perspective
Organizer; Koji DERIHA (Hokkai-Gakuen University)
Chair; Sachiko KUBOTA (Kobe University)
Thu 21 November 10:15 am to 12:00 pm

Re-thinking the Exhibition ”Craft and Spirit of the N. G. Munro Collection” (2002, in Japan) from the Viewpoint of “Contact-zone”
Koji DERIHA (Hokkai-Gakuen University)
On Ethnographic Allegory through the Repatriation Story of Stolen Vigango (Mijikenda Memorial Statutes in Coastal Kenya) in the Postcolonial World
Katsuhiko KEIDA (Kumamoto University)
What We Should Do, What We Can Do－The Responsibility of Archaeologists toward Indigenous Repatriation
Hirofumi KATO (Centre for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University)
Repatriation and Reclamation from Museums: What these mean for Indigenous Communities and Indigenous Archaeology
Sven HAAKANSON (University of Washington)
A Comparative Study on the Changing Relationship between Indigenous Peoples and Museums, with a Special Focus on Repatriation
Sachiko KUBOTA (Kobe University)
Discussant:
James CLIFFORD (University of California, Santa Cruz)

5-1140 Harkening Voices of the Other: Ethics and Struggles for Repatriation of Human Remains on the Margins of Japan
Organizer: Yoshinobu OTA
Chair: Noriko SEGUCHI
Sat 23 November 4:15 pm to 6:00 pm

Toward the Ethics of Listening the Voices of the Other: Learning form Ainu Struggles for Repatriating Ancestral Remains
Yoshinobu OTA (Kyushu University)
Repatriation of Ainu Remains and The Responsibilities of Japanese Physical Anthropology: What Are Real Contributions to the Ainu Community?
Noriko SEGUCHI (Kyushu University)
"Stealing remains is criminal": Ethical, Legal, and Social Issues of the Repatriation of Remains to Ryukyu Islands, southern Japan
Mitsuho IKEDA (Osaka University)
Multiple Voices of Ainu and Amnesia of Pain: the Complex Post Colonial Situation in Japan
Mai ISHIHARA (Hokkaido University)
Discussants:
Joe WATKINS (Archaeological and Cultural Education Consultants)
Chip COLWELL (Denver Museum of Nature & Science / SAPIENS)

（5）なお、AAA 参加メンバーについて、発表を踏まえての研究の到達点と今後の課題について記せば、以下のとおりである。（以下はメンバーが分担して記述している）
出利葉浩司
これまで博物館が器物とともに集めた民族知、画像や映像に記録されている情報などいわゆるソフトウェアについての「民族知の返還」、あるいはそれらを先住民側と「共有」することについて、またとくに遺骨や器物の返還に際しておこる「議論」「葛藤」「交渉」「和解」について、あらためて注目する機会を得た。そこに注意しながら、博物館が、先住民の人びとととともにおこなっている資料調査や展示活動について再考を試みた。その結果、そこで展開される状況は、これまで「協働」という言葉で一括りに表現されてきたが、それよりむしろジェイムズ・クリフォードが論文「接触領域としてのミュージアム」（1997=2002）のなかでコンタクト・ゾーンと呼んだ、さまざまな諸条件を含んだ「さまざまな意見が交錯する場」としてとらえなおすことの意義に注目した。
おおくの博物館およびその仕組みが植民地主義を経てきたという歴史的背景にたちかえって、考え、認識しなおすなかで、博物館における先住民資料返還や先住民文化展示のあり方について、北米やカナダなどでの実践は、たんに博物館業務が「変わった」、資料管理基準の変更とのみ捉え、要求を満たせばそれですべてが「解決済み」と考えるべきではないということをあらためて認識することになった。つまりそれは「一過性」のものではなく、今後、さまざまな「協働」作業を考えていかねばならないことなのだ。その意味で、クリフォードのいう、博物館という場所で、先住民（族）と博物館とが創り出す「コンタクト・ゾーン」は、あらためて注目されてよい概念だろうと考えている。
太田好信
本研究は、殖民国家における先住民（族）と入植者との歴史的関係について批判的に考察することを促したこと。このことは、遺骨、器物の返還が完了すれば、問題が自動的に解決するわけではないことを意味している。しかし、その問題を解決するために十分な理論化がおこなわれてきたとはいいかたい。広義の「返還」は、器物や遺骨の収集をおこなってきた学問を巻き込み、それを可能にした歴史への反省を求める。そのような先住民（族）からの問いかけに、どう応答するのかは今後の課題である。
わたしは、本研究の結果として提起された、以上の問題を、日本におけるアイヌ民族ならびに琉球民族による遺骨返還運動に着目し、歴史的負の遺産を未来において解決すべく、「先住民（族）研究」すなわち先住民（族）による先住民（族）のための研究の樹立にむけ、学問と社会運動とを連携する公共哲学の確立をめざしたいと考えている。そのため、科学研究費基盤研究 A（代表者：太田好信、課題番号： 20H00048）「先住民族研究形成に向けた人類学と批判的社会運動を連携する理論の構築」（2020 年度～2024 年度：採択済み）を継続していく。
窪田幸子
オーストラリアでの返還の歴史経緯と現在について、改めて調査検討し、日本での返還の実情と比較しながら発表をおこなった。今後の方向として、返還に関わる問題として、和解の重要性が見えてきたので、比較の視点から研究を展開する予定である。
慶田勝彦
資料返還に関して日本のアイヌ民族の現在の動向についての見識を深めると同時に、国際的な比較の視点から、米国の NAGPRA に基礎づけられた北米先住民の資料返還活動をケニア海岸地方ミジケンダの祖霊木彫 Vigango の盗難と返還に応用した運動について、博物人類学的観点からの研究を推進した。本研究成果は 2020 年８月開催の ACHS(Association of Critical Heritage Studies) 2020 Futures での国際学会発表につながり、今後は国立民族学博物館を媒介とした国際的な文化遺産研究へと発展させていく予定である。これらの研究は、国内では北海道や沖縄の先住民に関する研究資料や＜水俣病＞事件に関する研究資料を対象とした地域アーカイブ研究、そして海外においてはポストコロニアルな状況と不可分の博物館人類学の新たな可能性としてのアーカイブ人類学として発展さていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 手塚薫	４．巻 32
２．論文標題 祭礼の可視化と記憶地図	５．発行年 2020年
３．雑誌名 北海学園大学学芸員課程学事報告書	６．最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手塚薫	４．巻 1月
２．論文標題 アイヌ文化研究における千島列島の意義	５．発行年 2020年
３．雑誌名 グリーンパワー	６．最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太田好信	４．巻 21
２．論文標題 いま、ハヨピラの前に立ち、CBAの活動について考えることー空飛ぶ円盤から『ポスト真実』まで	５．発行年 2020年
３．雑誌名 沙流川歴史館年報	６．最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ,窪田幸子	４．巻 単行本
２．論文標題 和解という道筋の可能性を考える	５．発行年 2020年
３．雑誌名 月村太郎編『部族紛争後状況の多元的研究』（晃洋書房）	６．最初と最後の頁 77-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 出利葉浩司	4．巻 単行本
2．論文標題 学芸員によるトークのあれこれ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 稲村哲也編『博物館概論』（放送大学教育振興会）	6．最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 出利葉浩司	4．巻 単行本
2．論文標題 北海道博物館の海外交流ーとくにカナダ・アルバータ州ロイヤル・アルバータ博物館との交流について，	5．発行年 2019年
3．雑誌名 稲村哲也編『博物館概論』（放送大学教育振興会）	6．最初と最後の頁 263-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 手塚薫	4．巻 68
2．論文標題 北海学園大学人文学会第6回大会シンポジウム記録　人文学（文化研究）と実学（観光研究）と実践（観光振興）をつなぐ　コメント	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北海学園大学人文論集	6．最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 手塚薫	4．巻 31
2．論文標題 震災記憶のアーカイブと伝承	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北海学園大学学芸員課程学事報告書	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々木理子・蝉塚咲衣・稲垣森太・手塚薫	4．巻 15
2．論文標題 記憶地図作成による地域情報の可視化-奥尻島谷地地区における事例	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北海道民族学	6．最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田好信	4．巻 84(1)
2．論文標題 書評　坂野徹（編）『定刻を調べる－植民地フィールドワークの科学史』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 112-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 KUBOTA, Sachiko	4．巻 単行本
2．論文標題 Crafts to Arts? - A Trajectory of Aboriginal Women's Weaving in Arnhem Land, Australia	5．発行年 2019年
3．雑誌名 NAKATANI, Ayami ed. 『Fashionable Traditions; Ashian Handmade Textiles in Mortion』 (Lexington Books)	6．最初と最後の頁 177-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 窪田幸子	4．巻 単行本
2．論文標題 ナショナルな歴史経験とトラウマ-先住民への謝罪と和解	5．発行年 2019年
3．雑誌名 田中雅一・松嶋健編『トラウマ研究Ⅱ　トラウマを共有する』（京都大学出版会）	6．最初と最後の頁 196-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅谷昭範・伊藤敦規	4．巻 2
2．論文標題 天理大学付属天理参考館収蔵北米先住民資料の来歴	5．発行年 2019年
3．雑誌名 天理大学付属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧ーソースコミュニティと博物館資料の「再会」2	6．最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 出利葉浩司	4．巻 単行本
2．論文標題 序文にかえて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 手塚薫・出利葉浩司編『アイヌ文化と森』（風土デザイン研究所）	6．最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 出利葉浩司	4．巻 単行本
2．論文標題 道具にみる木の利用	5．発行年 2018年
3．雑誌名 手塚薫・出利葉浩司編『アイヌ文化と森』（風土デザイン研究所）	6．最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 手塚薫	4．巻 単行本
2．論文標題 非国家社会における戦争と平和；アイヌ社会の緩衝機能を探る	5．発行年 2018年
3．雑誌名 佐藤貴史・松村優子・村中亮夫編『はじめての人文学』所収	6．最初と最後の頁 137-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 手塚薫	4．巻 単行本
2．論文標題 流れ寄る樹ー千島列島における木材利用の歴史	5．発行年 2018年
3．雑誌名 手塚薫・出利葉浩司編『アイヌ文化と森』（風土デザイン研究所）	6．最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田好信	4．巻 単行本
2．論文標題 フランツ・ボアズ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』（昭和堂）	6．最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田好信	4．巻 単行本
2．論文標題 ジェイムズ・クリフォード	5．発行年 2018年
3．雑誌名 岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』（昭和堂）	6．最初と最後の頁 215-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤敦規	4．巻 160
2．論文標題 映像を用いた博物館資料情報の再収集	5．発行年 2018年
3．雑誌名 民博通信	6．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田好信	4．巻 158
2．論文標題 先住民から学び、変容する学問をめざして	5．発行年 2017年
3．雑誌名 民博通信	6．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kubota, Sachiko	4．巻 単行本
2．論文標題 Conflict and Peacebuilding rituals in North Australia-Traditional and contemporary contexts	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Tsukimura, T ed. "Conflicts and Peacebuilding; Toward the Sustainable Society	6．最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kubota, Sachiko	4．巻 単行本
2．論文標題 Transmission of Knowledge,Clans, and Lands among the Yolng (Northern Territory, Australia)	5．発行年 2017年
3．雑誌名 F. Dusart, S. Poirier ed. "Entangled Territorialities; Negotiating Indigenous Lands in Australia and Canada"	6．最初と最後の頁 163-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤敦規	4．巻 422
2．論文標題 ソースコミュニティと博物館資料との『再会』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 文部科学教育通信	6．最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田好信	4．巻 単行本
2．論文標題 文化人類学と『菊と刀』のアフターライフ	5．発行年 2016年
3．雑誌名 桑山敬己編『日本はどのように語られたか』（昭和堂）	6．最初と最後の頁 31-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田好信	4．巻 154
2．論文標題 ポストコロニアルになるとは？	5．発行年 2016年
3．雑誌名 民博通信	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤敦規	4．巻 42
2．論文標題 ホストとして関わる人類学ー米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから	5．発行年 2016年
3．雑誌名 社会人類学年報	6．最初と最後の頁 67-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計31件（うち招待講演　11件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 KUBOTA, Sachiko
2．発表標題 Changes in the Repatriation; Issues Concerning Ainu People, Japan, and Involvement of Academics
3．学会等名 ICAS: MP Workshop 'New Roles of Professional Historians in Politics and New Forms of Public Use of Hisotry'（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 DERIHA,Koji
２．発表標題 Re-thinking the Exhibition ”Craft and Spirit of the N. G. Munro Collection” (2002, in Japan) from the Viewpoint of “Contact-zone
３．学会等名 118th Annual Meeting of American Anthropological Association and Canadian Anthropology Society, on November 23, Vancouver, BC, Canada（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出利葉浩司
２．発表標題 それぞれの道具の利用と森
３．学会等名 北海学園大学　恵庭市立図書館共同企画　第19回「人文学の挑戦」『アイヌ文化と森』（北海道恵庭市）
４．発表年 2019年

１．発表者名 手塚薫
２．発表標題 千島列島の人々と木の利用について
３．学会等名 北海学園大学　恵庭市立図書館共同企画　第19回「人文学の挑戦」『アイヌ文化と森』（北海道恵庭市）
４．発表年 2019年

１．発表者名 OTA, Yoshinobu
２．発表標題 Toward the Ethics of Listening to the Voice of the Other: Learning from Ainu Struggles for Repatriating Human Remains
３．学会等名 118th Annual Meeting of American Anthropological Association and Canadian Anthropology Society, on November 23, Vancouver, BC, Canada（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 夢から倫理へ　フィールドでの出会いにおいて何を託されたのか
３．学会等名 第40回日本ラテンアメリカ学会定期研究大会シンポジウム「ラテンアメリカ研究ー地域性と学際性とを架橋する経験から導かれるもの」（東京都八王子市）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 KUBOTA, Sachiko
２．発表標題 Changes in the Repatriation: Australia and Japan Comparatively
３．学会等名 118th Annual Meeting of American Anthropological Association and Canadian Anthropology Society, on November 23, Vancouver, BC, Canada（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 窪田幸子
２．発表標題 和解という道筋の可能性
３．学会等名 科学研究費補助金による研究会　紛争研究
４．発表年 2019年

１．発表者名 KUBOTA, Sachiko
２．発表標題 Repatriation of Ainu Human Remains
３．学会等名 Swansei Gakuin Workshop on Recociliation（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 KUBOTA, Sachiko
２．発表標題 Ainu, the Japanese Indigenous Peoples-its History and Changes
３．学会等名 Anthropology Seminar, Waikato University, Hamilton, New Zealand（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 窪田幸子
２．発表標題 先住民研究とオーストラリア　グローバルな視座と地域
３．学会等名 学術会議地域研究委員会地域基盤分科会　公開シンポジウム「危機を超えて　地域研究からの価値の創造」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 KEIDA, Katsuhiko
２．発表標題 On Ethnographic Allegory through the Repatriation Story of Stolen Vigango (Mijikenda Memorial Statutes in Coastal Kenya) in the Postcolonial World
３．学会等名 118th Annual Meeting of American Anthropological Association and Canadian Anthropology Society, on November 23, Vancouver, BC, Canada（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出利葉浩司
２．発表標題 欧米の博物館から見た先住民文化の展示　いま博物館が直面している課題とは
３．学会等名 サッポロアートラボSALA（札幌市）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 出利葉浩司
２．発表標題 サケをめぐるアイヌの人びとの暮らし
３．学会等名 オープンサイエンスパーク千歳　持続可能な街づくりのための『千歳学ことはじめ　その１』（北海道千歳市）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 出利葉浩司
２．発表標題 それぞれの道具の利用と森
３．学会等名 北海学園大学人文学部主催　第17回人文学の挑戦「アイヌ文化と森　人々と森の関わり」（紀伊國屋書店；札幌市）
４．発表年 2018年

１．発表者名 手塚薫
２．発表標題 千島列島の人びとと木の利用について
３．学会等名 北海学園大学人文学部主催　第17回人文学の挑戦「アイヌ文化と森　人々と森の関わり」（紀伊國屋書店；札幌市）
４．発表年 2018年

１．発表者名 OTA, Yoshinobu
２．発表標題 Unpacking Meanings of “Coming Home
３．学会等名 Fourth World Social Science Forum, on September 26, Fukuoka, Japan（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 遺骨を語ることば―歴史への反省から生じる学問の倫理
３．学会等名 第72回　日本人類学会大会　大会分科会「人骨研究の在り方：アイヌ遺骨研究が投げかける問題と人類学の未来を考える」（組織者：瀬口典子・五十嵐由里子）
４．発表年 2018年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 問題提起　収集された遺骨・副葬品のゆくえ
３．学会等名 九州大学比較社会文化研究院シンポジウム「アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ―返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説（福岡市；JR博多シティ）
４．発表年 2018年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 いま、ハヨピラの前に立ち、CBAの活動について考えることー空飛ぶ円盤から『ポスト真実』まで
３．学会等名 沙流川歴史館における講演（北海道平取町）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sachiko KUBOTA
２．発表標題 Different relationships- Indigenous people and the museum in Japan and Australia
３．学会等名 Art, Materiality and Representation（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤敦規
２．発表標題 ソースコミュニティと博物館資料との『再会』
３．学会等名 国立民族学博物館シンポジウム『ミュージアムの未来』－人類学的パースペクティブ（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤敦規
２．発表標題 北米と歴史的遺物返還
３．学会等名 日本学術会議地域研究委員会「歴史的遺物返還に関する検討分科会」第24期第2回（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 エクリチュールと倫理　『文化を書く』（1986年）のアフターライフ
３．学会等名 国際シンポジウム「民俗／族学のエクリチュール」（東京都；日仏会館）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kubota, Sachiko
２．発表標題 "Crafts' to 'Arts'? -Weavings of Aboriginal Women and its Change"
３．学会等名 IUAES/CASCA（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 窪田幸子
２．発表標題 少数者を表象から考えるということ
３．学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 窪田幸子
２．発表標題 国家的暴力と和解　オーストラリアとカナダの事例から
３．学会等名 紛争科学研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kubota, Sachiko
２．発表標題 Aboriginal arts and changes of their acceptance in different 'states'
３．学会等名 Australian Anthropological Society Annual meeting（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 人文・社会科学のヴィジョンを描くための第一歩
３．学会等名 シンポジウム「現代社会における人文・社会科学のとは何かー文化人類学からの応答の試み」
４．発表年 2016年

１．発表者名 太田好信
２．発表標題 人文・社会科学のヴィジョンを描くための第一歩
３．学会等名 日本文化人類学会主催シンポジウム「現代社会における人文・社会科学のとは何かー文化人類学からの応答の試み」（福岡市；九州大学西新プラザ）（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 伊藤敦規
２．発表標題 北米と歴史的遺物返還
３．学会等名 日本学術会議地域研究委員会「歴史的遺物返還に関する検討分科会」第24期第2回（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 伊藤敦規編	４．発行年 2019年
２．出版社 国立民族学博物館	５．総ページ数 219
３．書名 天理大学付属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧－ソースコミュニティと博物館資料との「再開」2	

１．著者名 手塚薫・出利葉浩司編	４．発行年 2018年
２．出版社 風土デザイン研究所	５．総ページ数 116
３．書名 アイヌ文化と森；人々と森の関わり	

１．著者名 伊藤敦規編	４．発行年 2017年
２．出版社 国立民族学博物館	５．総ページ数 1375
３．書名 国立民族学博物館所蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧ーソースコミュニティと博物館資料との「再会」1（国立民族学博物館調査報告SER140）	

１．著者名 伊藤敦規	４．発行年 2016年
２．出版社 国立民族学博物館	５．総ページ数 132
３．書名 伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有ー民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望（国立民族学博物館調査報告SER137）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	手塚　薫 (TEZUKA Kaoru) (40222145)	北海学園大学・人文学部・教授 (30107)	
研究協力者	太田　好信 (OTA Yoshinobu) (60203808)	九州大学大学院・比較社会文化研究院・教授 (17102)	
研究協力者	窪田　幸子 (KUBOTA Sachiko) (80268507)	神戸大学大学院・国際文化学研究科・教授 (14501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	慶田　勝彦 (KEIDA Katsuhiko) (10195620)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部・教授 (17401)	
研究協力者	伊藤　敦規 (ITO Atsunori) (50610317)	国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・准教授 (64401)	